

ピーター・ドラッカーから見るバックミンスター・フラーの人間性

2016年11月10日 卒業論文最終発表
中谷礼仁研究室 重本大地

目次

第1章 序論

- 1.1 目的
- 1.2 背景
 - 1.2.1 バックミンスター・フラー
 - 1.2.2 ピーター・ドラッカー
 - 1.2.3 既往研究

ドラッカーとフラーの関係に関する研究
フラーに関する研究

- 1.3 研究意義
- 1.4 手法

第2章 傍観者の時代

- 2.1 この章の目的
- 2.2 傍観者ドラッカー
- 2.3 ふたりの出会い
- 2.4 予言者としてのフラー
- 2.5 現実主義者としてのフラー
- 2.6 教師としてのフラー
- 2.7 フラー、ドラッカー、マクルーハン
 - 2.7.1 ドラッカーとマクルーハン
 - 2.7.2 フラーとマクルーハン
- 2.8 モノマニアック
- 2.9 仕事の欠落
- 2.10 予言者のパラドックス
- 2.11 小結

第3章 社会

- 3.1 この章の目的
- 3.2 社会
 - 3.2.1 社会についての一般理論
 - 3.2.2 宇宙船地球号
- 3.3 政治
 - 3.3.1 政府の限界
 - 3.3.2 ワールドゲーム
- 3.4 技術
 - 3.4.1 技術と仕事
 - 3.4.2 デザイン・サイエンス革命

第1章 序論

1.1 目的

フラーとドラッカーの社会のあり方と個人の生き方に関する思想を比較する。その上で、ドラッカーの視点からフラーを評価する。

1.2 背景

- 1.2.1 バックミンスター・フラー
- 1.2.2 ピーター・ドラッカー



図 1 Buckminster Fuller (1895-1983)



図 2 Peter F. Drucker (1909-2005)

1.2.3 既往研究

■ドラッカーとフラーの関係に関する研究

- 脇秀徳「科学者のためのドラッカー」
- フラーに関する研究
 - レイナー・パンハム「第一機械時代の理論とデザイン」
 - ケネス・フランプトン「現代建築史」
 - 渡辺保忠「文化概念の変革を求めて——文化の生産的機能」
 - マーティン・ボーリー『バックミンスター・フラー』
 - 渡辺武信「記者あとがき」『バックミンスター・フラー』

1.3 研究意義

フラーを見る視点の新しさ

フラーにとって建築や住居とは、自らの理論を現実化するに適した偶然の対象にすぎなかった。自らのアイデア、知性と行動をもとに世界を変えようとしたフラーの人生は本来、建築史からの視点ではなく、より広範な思想史・産業史の観点から見られるべきものである。

ドラッカーからフラーを見る妥当性

ひとつには、ふたりが友人であったこと。もうひとつは、ふたりの問題意識と関心が大きく共通していたこと。フラーの思想から実践までを企業家・産業家としての観点から見ただけでなく、フラーの人間性にまで踏み込んで語ることができるのはドラッカーだけである。

1.4 手法

ドラッカー『傍観者の時代』の読み取り

『傍観者の時代』は、ドラッカーが出会った様々な興味深い人物について述べた本であり、第13章「テクノロジの予言者、フラーとマクルーハン」はフラーについての章である。

まずその章から、ドラッカーが直接述べたフラーへの評価を読み取る。(本論文第2章)

他の文献の読み取り

その他フラーとドラッカーの著作と第三者による著作をもとに、ドラッカーが直接的には述べなかった部分についても、ドラッカーから見たフラーの評価を構築する。

人間が生きていく前提であり貢献の対象である社会、ひとりひとりの人間が位置と役割を得るための組織、そして個の順で論じる。(本論文第3章から第5章)

第2章 傍観者の時代

2.1 この章の目的

ドラッカー著『傍観者の時代』(*Adventures of a Bystander*, 1978) 第13章「テクノロジの予言者、フラーとマクルーハン」からドラッカーのフラーに対する直接的評価とふたりの関係性を読み取る。

2.2 傍観者ドラッカー

ドラッカー『傍観者の時代』

私自身面白くない人に会ったことがない。いかに順応的で保守的であろうと、自分のしていること、知っていること、興味をもつことについて話し始めるや、誰もが魅力的になる。そのとき、誰もが個となる。^[1]

ドラッカーの興味の中心は常に、ひとりひとりの人にあった。

2.3 ふたりの出会い

フラー → 『フォーチュン』誌技術コンサルタント

ドラッカー → 『フォーチュン』誌助っ人

ドラッカー『傍観者の時代』

一九四〇年、ヘンリー・ルースと『フォーチュン』創刊一〇周年記念号の仕事をしている頃、私は文字どおりバックキ・フラーとぶつかった。

ある編集者の部屋から後さざりをして出てきた私は、何か大きな物にぶつかって倒れた。私の背後でも何かか転がり、起き上がったようだった。倒れたままの私に、そのものは「これでラテンアメリカの経済発展は一〇年は遅れた」といい置いて、そのまま行ってしまった。フラーは車輪付きの足場に乗し、壁と天井に世界経済の発展について大きなグラフを描いていたのだった。^[2]

2.9 仕事の欠落

ドラッカー『傍観者の時代』

しかし私は、バックミンスター・フラーとマージャー・マクルーハンのいずれも、テクノロジと、文化と、哲学の統合に成功することはないのではないかと思う。彼らの描くビジョンには、テクノロジと人間特有の活動としての「仕事」を関連づけるものがないからである。^[3]

2.11 小結

ドラッカーがアララーを称して

「予言者」「現実主義者」「大聴衆の教師」「言葉の泡風呂」「モノマニアック」「仕事の欠落」「予言者のパラドックス」

第3章 社会

3.1 この章の目的

ドラッカーは、社会とは人々が貢献する対象であり、自分たちがどのような社会に生きているのかを知らなければ、どのようにに貢献をすればよいかわからないと考えた。その社会について、ドラッカーとアララーの思想を比較する。

3.2 社会

3.2.1 社会についての一一般理論

ドラッカー『産業人の未来』

社会というものは、一人ひとりの人間に対して「位置」と「役割」を与え、重要な社会権力が「正統性」をもたなければ機能しない。[4]

3.4 技術

3.4.1 技術と仕事

ドラッカー『傍観者の時代』

道具としてのテクノロジーと、文化としてのテクノロジーが一つのものになるのが、実に「仕事」においてである。そしてバッキーマーシャルも、ついで注目するにいたらなかったものが、この「仕事」だった。[5]

3.5 地球環境問題

何によって地球環境問題は解決されるか

ドラッカー→ 全地球的な政策

アララー → 誠実な個人の努力と直観

3.6 未来

未来の予測方法

ドラッカー→ すでに起こった未来（新しい現実）を見る。

アララー → エネルギーを見る。

3.7 小結

行動の基底にあるもの

ドラッカー → 社会の不確実さにもとづく目的意識をもった発展

アララー → 宇宙の確実な進歩にもとづく必然的な発展

第4章 組織

4.1 この章の目的

ドラッカーは、人々が現代の社会に貢献するにあたり、組織に依存せざるを得ないと考えた。その組織について、ドラッカーとアララーの思想を比較する。

4.2 組織

4.2.1 組織とマネジメント

ドラッカー「ある社会生態学者の回題」

私にはすでに、第二次大戦がはじまったころには、人間社会の主要な問題のすべてが、マネジメントされた社会的機関によって取り組みられるようになるという組織社会の到来が見えていた。[6]

ドラッカー『マネジメント』

成果をあげる責任あるマネジメントこそ全体主義に代わるものであり、われわれを全体主義から守る唯一の手だてである。[7]

4.2.2 ひとりの男にできること

アララー『クリティカル・パス』

私は自分だけでやるという原則と直観力のみを基本にして仕事をするように努めた。[8]

4.3 企業

4.3.1 顧客の創造

ドラッカー『現代の経営 [上]』

企業の目的として有効な定義は一つしかない。すなわち、顧客の創造である。[9]

ドラッカー『現代の経営 [上]』

企業人の代わりに私欲のない天使が役員の椅子に座っても、利益については関心をもたざるをえない。[10]

4.4 理解と信頼

アララーが講演で話す言葉は全くもって理解不能であるが感動的であり神秘的であることを、ドラッカー、ジョン・ケージ、アララーの孫、ジェイ・ボールドウィン、ロバート・キヨサキなどが証言している。

ドラッカー「コンサルタントの条件」

そもそも組織は理解と信頼の上に成り立つものであって、職階図の上にはない。理解のないところに信頼はない。若い人ほどそんな基本を知らない。そんなとき純粋さほど始末に負えないものはない。ある種の純粋さ、熱血は扇動政治家や独裁者の証だった。今世紀最大の純粋な人物を挙げると問われれば、私はヒトラーと答ざるをえない。だが、若者がそれを理解するのはなかなか難しい。[11]

ここに、ドラッカーが命懸けて批判したヒトラーと、アララーの影が重なる。

4.5 小結

ドラッカーからアララーに対して言えること

「利益の欠落」「顧客の欠落」「理解なき信頼」

第5章 個

5.1 この章の目的

社会と組織のなかで生きている個人がどのような仕事をし学び生きているかについての、ドラッカーとアララーの思想を比較する。

5.2 自己

自らを何であるとするか

ドラッカー → 「社会生態学者」

アララー → 「モルモット B」「トリムタブ」

5.3 学習

何から学ぶか

ドラッカー → 他人の成功から学ぶ。

アララー → 自分の失敗から学ぶ。

5.5 何によって憶えられたいか

5.5.1 シュペンターの教え

ドラッカー『非営利組織の経営』

今日でも私は、いつもこの問い、「何によって憶えられたいか」を自らに問いかけている。これは、自己刷新を促す問いである。自分自身を若干遠う人間として、しかしなりうる人間として見るよう仕向けてくれる問いである。[12]

5.5.2 アラーのやるうとしたこと

アララー、カリフォルニアの講演にて

わたしの名前を覚えていてほしいとは思わない。わたしのやるうとしたことをいつも思い出してほしい。[13]

ドラッカー『傍観者の時代』

誰も、アララーがどう話し、どう身振りをしたかはもちろん、どのような姿かたちだったのかも覚えていない。四〇年前のペンニンтон大学の学生以来、あらゆる聴衆が体験するのは、バッキーマー・アララーではなく、バッキーマー・アララーが見るビジョンだった。[14]

5.6 実存

5.6.1 もう一人のキルケゴール

ドラッカー「もう一人のキルケゴール」

キルケゴールの信仰もまた、人に死ぬ覚悟を与える。だがそれは同時に、生きる覚悟を与える。[15]

5.6.2 アラーの信仰と死

ブレネマン『アララーがぼくたちに話したこと』

私はアララーの死の翌朝、ベンジャミン・マックと話した。「きのうの夜、彼が亡くなったって聞いて、最後のミーティングのとき、彼が生命と死と再生のことを話していたのを思い出したんだ」ベンは私に思いい出をよみがえらせた。「あなたも知っているように、バッキーマーは今も生きていて、やらなきゃならないと思っっていることを、今もききとやっっているんだよね」[16]

5.7 小結

「人間への絶望にもとづく個々への愛」と、「自分への絶望にもとづく全人類への愛」こそが、ドラッカーとアララーの違いであった。

第6章 考察

各章で述べたドラッカーから見たアララーの性質の全体を貫く本質を考察。

第7章 結論

アーレント、アイヒマン論争についてのショレームへの書簡にて

わたしは人生においてなんらかの民族あるいは集団を「愛した」ことは一度もありません。（中略）わたしはじっさいわたしの友人たち「だけ」を愛するのであり、わたしが知っていて信じている唯一の種類の愛は個人への愛です。[17]

7.1 結論

アララーのひとりひとりの人間への興味の欠落が、彼の成功および失敗双方の根源にあった。

7.2 今後の課題

- クロノファイル（アララーの人生の記録）の探索。
- ドラッカー以外の人物とアララーの関係の調査。
- アララー以外の人物とドラッカーの関係の調査。

参考文献

- P. F. ドラッカー 著、田村生 訳『傍観者の時代』ダイヤモンド社、2008年、p. Ⅲ
- 『傍観者の時代』、p.287
- 『傍観者の時代』、p.297
- P. F. ドラッカー 著、田村生 訳『産業人の未来』ダイヤモンド社、2008年、p.246
- 『傍観者の時代』、p.298
- P. F. ドラッカー 著、田村生 ほか 訳『すでに起こった未来』ダイヤモンド社、1994年、p.307
- P. F. ドラッカー 著、田村生 訳『マネジメント [上] 一 課題、責任、実践』ダイヤモンド社、2008年、pp.Ⅲ、Ⅳ
- バクミンスター・アララー 著、梶川泰司 訳『クリティカル・パス』白揚社、1998年、p.218
- P. F. ドラッカー 著、田村生 訳『現代の経営 [上]』ダイヤモンド社、2006年、p.46
- 『現代の経営 [上]』、p.44
- ドラッカー学会 監修、三浦一郎・井坂謙志 編著『ドラッカー→人・思想・実践』文芸春秋、2014年、p.241
- P. F. ドラッカー 著、田村生 訳『バクミンスター・アララー デザインサイエンス革命』、p.220
- 東洋館 1988年7月号『バクミンスター・アララー デザインサイエンス革命』、p.19
- 『傍観者の時代』、p.292
- P. F. ドラッカー 著、田村生 訳『人への愛』ダイヤモンド社、2000年、p.267
- トナト、ド・ブレント、ブレイク、著『政治学』岩波書店、1997年、p.10
- 『現代の経営 [上]』、p.318
- 『現代の経営 [上]』、p.318
- 『バクミンスター・アララー - Wikipedia』、URL: https://ja.wikipedia.org/wiki/バクミンスター・アララー (2016年11月5日閲覧)。
- ドラッカーとは / プロフィール - ドラッカー日本公式サイト - ダイヤモンド社、URL: http://dmcker.diamond.co.jp/pages/profile (2016年11月5日閲覧)